因藩二十二士と黒坂泉龍寺

日野町黒坂地区のはずれ、中世頃に日野氏等の居城があったと伝わる黒坂要害山の麓に、曹洞宗瑠璃光山泉龍寺があります。泉龍寺は約３５０年前（慶長年間）に当時の黒坂藩主「関長門守一政」により建立されました。一政は開山堂において「開基」として日々供養されています。

泉龍寺は幕末期の国を憂うる鳥取藩の若き志士達のゆかりのお寺でもあります。

幕末を揺るがした二十二士

「因藩二十士」という言葉をご存じでしょうか。彼らの起こしたいわゆる「本圀寺事件」は、今から１５０年前のことです。

幕末の動乱期の日本を二分した尊皇攘夷論と佐幕論の対立は、鳥取藩内でもその例外ではありませんでした。文久三（１８６３）年８月17日に京都本圀寺において、藩内攘夷派の河田佐久馬（後の鳥取県権令（初代鳥取県知事と位置づけられます。））以下二十二名が、佐幕派の重臣等を襲撃し斬殺した事件が「本圀寺事件」です。事件後に一人は自刃、一人は行方不明となったため「因藩二十士」と言われて来ました。

二十名は京都での蟄居を経て、元治元（１８６４）年８月に日野町黒坂に移され泉龍寺を中心に約８ヶ月間、幽閉されました。そして鳥取に移された後、倒幕の中心であった長州藩を目指して脱走。途中の松江藩内手結浦において一部の志士が重臣遺族の仇討ちに合いますが、残りの志士は長州軍に身を投じ、やがて戊辰戦争や明治維新後の新政府において活躍することになります。

二十八士を一堂に供養

本年９月21日（旧暦８月17日）に泉龍寺において「因藩二十二士・本圀寺事件五烈士供養法要」及び「同供養碑・記念碑除幕式」が、双方の遺族の方々はじめ、かつての藩主池田家の十六代当主の池田百合子さん、平井知事、景山日野町長、泉龍寺檀徒・関係者約１５０人の列席のもと執り行われました。

除幕式では双方の遺族代表等が並んで供養碑記念碑の除幕テープカットを行いました。

供養碑は六方石（玄武岩）の柱を二十八人の志士に見立て一人一人の名前が刻まれています。記念碑には志士の写真とともに、平井知事による「平成維新」の揮毫を記し、造形ガラスにより時代の夜明けに希望を託した志士の心情を表しています。（表紙写真）

供養碑記念碑　テープカット

供養法要列席者

所期の尊皇の志を果たした志士たちも、将軍の実兄である藩主池田慶徳公の立場を尊重し佐幕思想をとり、討たれた重臣たちも、それぞれの立場や考え方による対立はありましたが、国のため、郷土のためとの思いに違いはないと、一堂に供養することを泉龍寺三島道秀住職が中心となって呼びかけられ、お互いの遺族の御理解のもと二十八士（本圀寺事件で討たれた重臣等五烈士、因藩二十二士及び手結浦で志士とともに討たれた民間人一人）の冥福が祈られることになったものです。

明治維新百五十年へ

また、前日の９月20日には、本圀寺事件を題材とした小説「忘れ雪」「夜明けの雪」等の著者、毛利宏嗣氏をお招きして記念講演会を、県日野振興センターと日野町の共催で開催しました。百人を超える方々に参加いただき、当時の社会背景から、事件後の志士達の動向や泉龍寺での暮らしぶり、地域の方々との交流の様子などが確認できました。

また、講演の中で、他国に移出する日野郡産の鉄鋼を境港に集積するため、天保六（１８３５）年「鉄山融通会所」が開設され、それまでの半農半漁の村が急速に発展し、現在の環日本海交流の拠点である境港となる契機となったことも紹介されました。

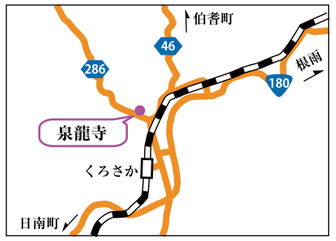
あと５年で明治維新１５０年を迎えます。今後、いろいろな場面で近代日本の幕開けとなる、維新前後の状況が取り上げられると思います。是非、泉龍寺を訪れて、若き志士達の志に触れ、郷土が維新前夜に重要な役割を果たしていたことに思いをはせてみてはどうでしょうか。

日野振興センターでは、地域の皆さんの誇りとしていただけるいろいろな地域資源を掘り起こし、地域の活性化や交流人口の拡大に結びつけるように取り組んで行きたいと考えています。

問　日野振興局 地域振興課 中山間地域振興担当　電話０８５９－７２－２０８０

夜明けの雪（毛利宏嗣氏著）

毛利宏嗣氏　記念講演会

瑠璃光山 **泉龍寺**

住所　日野郡日野町黒坂 421
電話　0859-74-0140